世界名作劇場

しょう　こう　し
小公子セディ

第 11 話

『うそだ!! ぼくが貴族になるなんて!』

提供　ハウス食品

制作　フジテレビ
日本アニメーション

脚本　石森史郎

登場人物（第11話「ぼくが貴族だなんてウソだ!!」）

セディ

アニー

ハビシャム

ホッブス

アレック

サラ

キャサリン

エリック

ボブ

ロ　　　イ

ミ ッ キ ー

修 道 尼

十歳の時のアニー

1

セディの家・ドア前の廊下

セディ「ハビシャムさん……母さんのお仕事の邪魔をしないで下さい……すぐに帰ってください!」

口ひげをふるわして見返すハビシャム。

驚いて見返しているアニー。

帰れと指さしてハビシャムを睨みつけて見上げているセディ。

ハビシャム、握りしめたステッキがふるえている。

セディ「(廊下の向うを指さしたまま) ハビシャムさん!」

言い終らないうちにアニーの声が飛ぶ。

アニー「セディ! ハビシャムさんに謝りなさい!」

え?! アニーを見るセディ。

同様にアニーを見るハビシャム。

アニー「ハビシャムさんに、セディ、あなたは今、とても失礼な言

葉を吐き、態度をとったんですよ！　ハビシャムさんに謝るんです！」

セディ「（不満顔）母さん！……」

ハビシャム、アニーから眼を離さない。

アニー「ハビシャムさんは、母さんに大切な用事があっておみえになったんですよ……そのハビシャムさんに、あのような口をきくなんて、母さん、許しませんよ！」

きびしく叱りつける。

ハビシャム、意外な表情でアニーを改めて見直す。

セディ、母の怒った顔を見て、眼を伏せ申し訳ない表情になる。

ハビシャム、そのセディを見る。

セディ、眼を上げてハビシャムを見上げ、

セディ「ハビシャムさん、ぼくが間違っていました……失礼なことを言って、ごめんなさい……申し訳ありません！」

頭をさげる。そして、仲々上げない。

ハビシャム、きびしくそのセディを見ていたが、大きく頷いて、

ハビシャム「セドリック様、顔を上げなさい」

顔を上げるセディ。

セディ「ハビシャムさん……ぼくは間違った事をした、いけない子なんですよ。それなのにどうしてぼくのこと、セドリック様って呼ぶんです?」

ハビシャム「え……それは……その……」

困った顔になるが、アニーの方を向いて、

ハビシャム「アニーさん、お仕事の邪魔をしてしまった私の方が悪かった……許して下さい……失礼します」

アニー「おかまいも致しませんで……」

2	
セディの家・LDK	

入って来るアニー、表情が沈んでいる
セディ、不安に見上げる。
セディ「母さんはまだ怒ってるの？……ぼく、ほんとに悪かったと
思ってます……ごめんなさい、母さん！」
アニー「う、ううん……反省しているんならいいの」
セディ「母さん……ハブシャムさんが母さんに大切な用事って、ど
んな用事だったの？」
アニー「え……セディには、関係のない事よ」
窓辺に立つ。
向うに停っている馬車に、歩み寄ったハビシャムが乗
り込むのが見える。
アニー「！……」
セディには判らないように表情を歪める。
ハビシャムの馬車、去って行く。
窓辺に硬い表情で立っているアニー。

セディがアニーの後姿を首をひねって見ている。

3

アパート・外景（夜）

灯っているガス灯。

アパートの窓の灯。

4

セディの家・アニーの部屋（夜）

ミシンに向っているアニー。ミシンが止まり、一点をきびしい表情でみつめているアニー。

部屋の外からフルートを握ったセディが見ている。

セディ「母さん……」

アニー、え?!　セディに顔を向ける。

セディ「母さん、キャサリンが合唱隊の制服をとっても楽しみにし

てた！」

アニー「そう……母さんも、だから、キャサリンの気に入るように

仕上げなけりゃね」

セディ「母さん、お仕事続けててよ。母さんがいつものように傍に

ついてってくれなくても、ぼく、ちゃんとフルートの練習や

るから」

アニー「そう……母さんが傍についてなくてもひとりで出来るのね」

フルートとセディの自立とをかけて一層複雑な思いで

言っている。

セディ「大丈夫さ。ぼくは、母さんがついていなくても！」

アニー「そう……ついていなくても、セディは……」

セディ「でも、間違えたら、いつものように注意して！　いいね、

母さん！」

ニッコリとアニーに言ってドアの前から離れる。

アニーの表情がつらく歪む。

5

LDK（夜）

譜面台に向って立つセディ。フルートを口に当て、吹き始める。

指も上手に動き、なめらかに吹いている。

6

アニーの部屋（夜）

アニー、表情を歪めて聞いている。

アニー「セディ……自分の運命が、この先どうなるのかも知らずに……！」

フルート、淀みなく流れている。

アニーの眼がキラキラ潤む。

7

LDK（夜）

セディ、無心にフルートを吹き続ける。

8　川べり――大橋の下

フルートを手にしたセディとキャサリン。

セディ「ぼくのフルートで？」

キャサリン「そオ。だから持って来て貰ったんじゃないの……それとも、いやだとでも言うの、セディ」

腰に両手を当てて胸を張りセディを見る。

セディ「（圧倒されて）いや、あの……」

キャサリン「セディ……私はいつもセディのお姉さんのつもりでセディの事可愛がって来たし、面倒みてるのよ。セディはお姉さんの言う事が聞けないって言うの！」

セディ「そんなこと、ぼく、言ってないよ」

キャサリン「だったら、協力しなさいよ……さ、この曲よ」

丸めて持っていた譜面をひろげてセディに渡すキャサリン。

セディ「（見て）難かしそうな曲！」

キャサリン「やっと私、合唱曲のメンバーになれたのよ。みんなに負けないようにしっかり練習しておきたいの！」

セディ「（呟く）ぼくだって、野球の練習しておきたいよ……」

キャサリン「セディ、今、何か言った?!」

セディ「う、ううん。ぼく、何も言わないよ」

キャサリン「だったら、早速、練習始めましょう……その前に発声練習を……アー！」

喉にひっかかった奇声をあげる。

セディ、思わず顔をしかめて耳を抑える。

ジロッとすごい眼で睨むキャサリン。

セディ、手を耳から離しニヤリ愛想笑い。

キャサリン、オペラ歌手のようなポーズで、ア、ア、

アー……ドレミファの発声をする。澄んだ美しい声である。

ほーうという表情で眼をみはるセディ。

キャサリン「セディ、OKよ。さ、吹いて！」

セディ、フルートを口に当て吹き始める。

——曲は讃美歌なのでポピュラーなもの、例えば『星座は眠る』のような——

キャサリン、美しい声で歌いだす。

9 橋の上

野球道具を手に走って来るエリックと三人組。

聞えて来る歌声に、ン?! と足を止めてキョロキョロする。

ボブ「あ……あれは、キャサリンの声だ！」

ロ　イ「あのフルートは……もしかしたら！」
ミッキー「（橋の下を覗いて）あ、セディ！」
エリック「あいつ！」
四人は走って川べりへ駈け降りて行く。

10　川べり

四人、走って来る。
エリック「そんな事してる場合じゃないだろ、セディ！」
ボ　ブ「早く行かないと、また空地を他の奴に取られちゃうよ！」
ロ　イ「野球の練習が出来なくなるだろ！」
キャサリン「やかましい！　練習の邪魔しないでよッ！」
怒鳴りつけられて四人、縮み上る。
キャサリン「あんた達も動かないで、そこで聞いてなさい！」
え?!　という顔をする四人。

キャサリン「セディ、続けて！」
セディ、四人の方に困った表情を見せてフルートを吹く。
歌うキャサリン、気分が乗ってくる。
あーあ、天を仰いで聞いている四人。

11 ホップスの店・表（夕）

セディが宙に放ったボールをグローブで受けながら帰って来る。
ホップスがぶすっと不機嫌に店先に転がっている空罐を踏みつぶしている。
セディ「ホップスさん！……面白くない事でもあったんですかア？」
ホップス「セディ！……さすがにセディだ。そうか、わしが腹を立ててるのが判るか」

セディ「一体、何が?!」
ホッブス「腹が立つやら、ムナクソが悪くなら！……ふん！……見たくないものを見てしまったんだ！」
セディ「見たくないものって？」
ホッブス「（セディの肩に手をかけ）わしが、貴族というものが大嫌いだって事を、前に、セディに話した事があったよな」
一緒に店に入っていく。

12

ホッブスの店・店の中（夕）

セディを両手で抱え上げて樽の上に腰掛けさせるホッブス。
ホッブス「今しがた、品物を届けに行った帰り、ホテルの前を通ったんだ。そしたら、見ただけでイギリスかどこかの貴族と判る男が、酔ッ払って馬車から降りた途端、走って来

た新聞売りの子供に、よろけてぶつかっていったんだ……それなのに、その野郎は自分が昼間っから酔っ払っているのを棚に上げて、新聞売りを殴り飛ばしたんだ」

13

回想——ホテルの前

酔った中年貴族、バシッとステッキで新聞売りの少年を打つ。

少年、路面に倒れ、抱えていた新聞がバサッとそのあたりに散らばる。少年、あわてて新聞を拾い集めようとするが、往来の激しい馬車の車輪に敷かれて汚れてしまう。

少年、ベソをかいた顔で中年貴族をうらめしく見上げる。

ふんと見下す中年貴族、札入れから貨幣を摑み出し投

げ棄てるように与える。

人垣の後ろから睨みつけているホップス。

中年貴族は付人と一緒にホテルに消える。

ホップスの声「気の毒に新聞は汚れちまって目茶苦茶だ……そしたら、その貴族野郎は横柄なツラで、金を投げ与えてホテルに消えて行っちまったんだ。すまないの一言も言わずに……金さえ出せば何でも片付くと思ってやがる！……それが奴等のやり口なんだ！……腹が立つったらありゃしない！」

14 ホップスの店・店の中（夕）

ホップス「貴族野郎に知り合いがいなくて本当よかったよ、全くの話が！」

セディ、非常に困って哀しげな表情でホップスを見て

いる。

ホッブス「ン?! どうした? セディ……急に元気のない、なんだか、哀しそうな眼をしちゃって……?!」

セディ「う、ううん……ホッブスさんの考えすぎ!」

笑顔を見せるが、すぐ寂しい表情になる。

ホッブス「そうか、判った! セディの母さんが、キャサリンの制服を作ってるんで、また根詰めて病気になりゃしないか……それを心配してるんだな……そうだろ? セディ」

セディ、う、うん……頷き返す。

ホッブス「やっぱし!!……わしの此の眼はセディの心の中は全部お見通しよ、ハハハ」

笑い乍ら、紙袋に玉子を幾つか入れる。

ホッブス「全く感心な子だよなあ、セディは……アニーも、セディのような母親想いの子供を持って幸せだよ。世界一の果報者だよ。全く、羨ましいよなあ!」

ひとりで納得し、羨まし気に言っているホップスを見
ているセディ。

ホップス「これ、母さんに持って行きな」

セディ「玉子を……こんなに?」

ホップス「セディの親想いの心に、わしの気持だよ……これ食べて
頑張るようにってな、母さんに!」

セディ「いつも申し訳ない!……ありがとう、ホップスさん!」

15

セディの家・アニーの部屋(夕)

玉子の入った紙袋をアニーのミシンの上に置くセディ!」

アニー「ホップスさんから?! また頂いて来たの、セディ!」

セディ「これ食べて頑張って欲しいって」

アニー「いつもいつも心にかけて頂いて、申し訳ないわねえ」

セディ「ぼく、大きくなったら、ホップスさんに恩返しをするよ」

アニー「セディは、そんな事を考えてるの?」

セディ「ホップスさんがいつも話して聞かせてくれるけど……ぼくが歩けるようになった時からホップスさんのお店が大好きで、いつも遊びに行ってたんでしょ?」

アニー「そうよ……ホップスさんには奥様がいらっしゃらないし、子供がいないから、セディの事を自分の子供みたいに可愛がって下さってたのよ」

セディ「いろんな事を教えてくれるからホップスさんといると、ぼく、楽しいんだよ……時々、政治がどうのこうのって、難かしい事も話してくれてチンプンカンプンだけど……」

アニー「本当にいいひとですものね……いつか、お返しが出来るようになったら、恩返しをしなきゃねえ……ホップスさんだけじゃなく、サラや……フェイや……この町の、お世話になっている皆さんに……!」

セディ「そうだよ……ぼく、うんと勉強して、立派な人になって、

きっと恩返しをするよ。きっとね！」

顔を輝やかせて言っているセディ。

アニー、硬い表情でみつめて頷き返す。

＜C・M＞

16

セディの家・セディの部屋（夜）

セディがベッドで眠っている。
毛布をそっと掛け直すアニー。
アニー、セディの寝顔をみつめる。

アニー「セディ……立派な人になって、お世話になった人達に恩返しをしたいって気持、母さん、とっても嬉しい……いつまでも、そのやさしい心を持ち続けるのよ！」

眠っているセディ。

アニー「セディは、立派な家系の子なのよ！」

セディをみつめているアニー、つらくなって部屋を出て、そっとドアを閉める。

17

アニーの部屋（夜）

18

回想——孤児院・冬

アニー、ミシンに向って坐る。
ミシンを踏もうとするが足が動かない。
アニー、沈痛に考え込む。

アニー「このままセディを私の傍に置いておく事がセディの幸せになるのだろうか……若し、私が此の間のように病気になってしまったら……そして、もし私が死んでしまうような事にでもなったら、セディは……」

アニー、ミシンから離れて窓辺に立つ。

アニー「ひとりぼっちになってしまう……ひとりぼっちになったら、かっての私のように、セディは孤児院に入れられてしまう……孤児院……あのつらく悲しくみじめだった孤児院での日々……！」

アニーの表情がみじめに哀しく歪む。

十歳のアニー、天秤棒で一杯入った水桶を井戸端から運んでいる。

雪……足許が滑る。よろけ水がこぼれる。

修道尼の鞭がアニーの細い脛を打つ！

修道尼「こぼさないで！　言った通りに働らかないと食事は抜きにしますからね！」

窓に顔を押しつけて同い齢の孤児が恐ろしそうに窺い見ている。

耐えて一歩一歩進んでいくアニー。

そのアニーの顔、姿が……

セディに変る！

セディ、雪の中を天秤棒を担いで一歩一歩、進む……

ずると足が滑って転ぶ。

そのセディにザブッと桶の水がかかる。

修道尼「それでも男！　この役立たず！」

19

アニーの部屋（夜）

情容赦なく鞭がセディに浴びせられる。

アニー、凍りついた表情で佇んでいる。
涙が眼からこぼれ出そうに光っている。

アニー「セディ……！」

20

セディの部屋（夜）

天使のような表情で眠っているセディ。

21

空　地

セディの明るい笑顔。

22

セディの家・LDK

例によって野球帽のツバをうしろにやって足を上げ、大きなモーションでボールを投げる。

ボールはキャッチャーのボブのミットへ！

ボブ「（受け）い、痛ってェ！（手を振る）」

バットを握るミッキー、大きく空振り。

ボブのうしろに立っていたエリックが、

エリック「ストライク！……真ッ直ぐのスピードボールだ！すごいぞ、セディ……マンハッタンの連中も空振り三振間違いなし！」

セディ、ニッコリ鼻の頭を手で拭う。

馬車が来て、離れて停る。

乗っているハビシャム、眼を向ける。

椅子に掛けているアレックのカップにポットのコーヒーを注ぐアニー。

アニー「此の間は、ドレス、お買い上げ頂いて……本当に助かりました。今だから話せますけれど、あの時は途方に暮れておりましたの」

アレック「いや、助かったのはわしのほうですわ……あの夜会服、家内にぴったりで、家内もすっかり気にいりまして……パーティに着て行きましたが……どこで買ったのかとか、どなたが作ったのかとか……大勢の奥さん達に囲まれて質問攻めに合いまして……お蔭で、わしの気分も爽快でしたよ、ハハハ」

アニー「それは……お役に立って、私も嬉しゅうございます」

アレック「そんな訳で、あのドレスを、うちの社のオーナーの奥様も気にいられて、どうしても、アニー、あんたに作って貰いたいと言いだしまして」

アニー「新聞社の社長の奥様が?!」
アレック「そう、是非にとね……ひき受けて貰えますよね！」
アニー「(硬い表情で苦悩している)……」
アレック「どうしたんだね？　アニー」
アニー「(決意の表情で見返えす)アレックさん……アレックさんの御好意、お心くばり、いつも感謝しておりますのよ……ですけど、今は私……お仕事をおひき受けする余裕が……申し訳ございません！」
アレック「忙がしいのかね。そりゃ結構な事だ……しかし、奥様は急いで仕上げて欲しいと言っている訳ではないんだから」
アニー「いいえ……そういう理由では……」
アレック「それでは、一体どんな理由で？」
アニー「セディの事でございます」
アレック「セディの?!」

23

空地

ボールが地面を転がっていく。
セディが走って追いかけている。
ボールが停る……停っている馬車の傍で。
追いかけて来たセディ、ハッと見る。
馬車の傍にハビシャムが立っている。
セディ「ハビシャムさん！」
ハビシャム「セドリック様（眼顔で挨拶）」
セディ「あ……ハビシャムさん、きのうは、申しわけありませんでした！」
ペコリ頭を下げてから緊張して見上げる。
ハビシャム、ふっと笑顔になる。
セディ、ホッとしてニッコリ笑い返す。

セディの家・ＬＤＫ

驚いて眼をみはるアレック。

アレック「セディが！……伯爵！」

アニー「前に、ジェイムズと私達がイギリスへ参りましたのは、ジェイムズに伯爵家を継ぐよう懇願されたからなのです」

アレック「そうだったのか……ジェイムズはイギリスの貴族……ひと言もジェイムズは話してくれなかったからねえ……いやあ、驚いたな、こりゃ！」

アニー「でも、ジェイムズはお父様と御意見が合わず、伯爵家を出て、私とセディのために、アメリカ人になりきって、このニューヨークで生きて行く決心をしたのです」

アレック「伯爵家後継者だったジェイムズが亡くなってしまったんだから、遺されたたった一人の血をひいたセディが、伯爵家の後継ぎになるのは当然だ……しかも、イギリスで

も由縁あるエロル伯爵家を、あのセディが継ぐとなると
……これは大ニュースだ、大スクープだよ！」
アニー「でも、アレックさん、その事はまだ」
アレック「判ってる……特ダネだが記事にする訳にはいかんよな…
…アニー、あんたがそんなに苦しんでいるんじゃ……」
アニー「いいえ、私の事より……何も知らずにいるセディが、本当
の事を知ったら……」

25

墓地

ジェイムズの墓。
その前に立っているハビシャム。
ハビシャム「このような姿のジェイムズ様におめにかかろうとは…
…私よりはるかに若いジェイムズ様が先にお亡くなり
になるなんて……」

涙が頬を伝う。
そっと見上げているセディ。ポケットから、ハンカチを取出し、ハビシャムの手にそっと渡す。
ハビシャム「セドリック様……有難うございます！」
そのハンカチで涙を拭くハビシャム。
ハビシャム「ニューヨークへ来て真ッ先にジェイムズ様に御挨拶しとうございました……案内して頂いて、セドリック様、ハビシャムは心から感謝しておりますよ」
セディ「父さんも喜んでるね、きっと」
ハビシャム、また涙ぐんで大きく頷く。

26 セディの家・LDK

アニー「（強い意志の表情で）いろいろ、悩みました……考えました……でも、セディは……やはり、迎えにこられたハビシ

ャムさんと一緒に行かせるのが、セディのために一番いいと、私は……」

アレック「アニー、セディのためによく決心した、そう言いたいが……アニーは、本当に……本当にそれでいいと思っているのかい?」

アニー「私はいいんです……セディの幸せのためです……セディが幸せになる道を、私はセディのために選んでやらなければ…」

アレック「(つらくアニーを見ている)……」

27

部屋の外の廊下

ホッブスが、ジャガイモやキャベツの入った袋を抱えてやって来る。

ドアを開けようとノブに手をかける。

中からアニーの声が洩れて聞えてくる。

アニーの声「セディには貴族の血が流れているんですものね……」
ホップス「セディに！　貴族……貴族の血?!」

28

LDK

アニー「貴族の道を歩ませるべきでしょう……それが、セディにしてやれる私の……母親の愛だと思います！」

29

部屋の外の廊下

顔をひきつらせたホップス。
ホップス「セディが……セディが貴族?!」
抱えていた袋からジャガイモが二ッ、三ッ足許にこぼれ落ちる。
ホップス、体をねじるようにして廊下を戻っていく。

ドアが開いて、アニーが顔を出す。
廊下にジャガイモが転がっている。
ホッブスの姿は無い。
訝っているアニーの顔。

30

ホッブスの店・表（夕）

やって来た馬車が停る。
ハビシャムが降りる。
続いて降りたセディを恭々しく待つ。
ホッブスが店の前に立って見ている。
ハビシャム「セドリック様……ジェイムズ様のお墓に御案内して頂きまして、有難うございました」
セディ「ハビシャムさん、馬車に乗せて頂いて、どうも有難う」
ハビシャム「いつでも乗せて進ぜます……それでは失礼致します」

頭をさげて馬車に乗込む。
ホップス、複雑な思いで見ている。
馬車が去って行く。
手を振って見送るセディ。アパートの方に行こうとしてホップスに気付く。

セディ「ホップスさーん！」
ニコニコ駈け寄る。
ホップス「（困惑の顔で）セディ……あの、つまり、その、だな」
セディ「ホップスさん、何言ってるの？　サッパリわかんないよ」
ホップス「あの、つまりだな……わしは、その、貴族が大嫌いだと言っていたが……あれは全部取り消すよ！　全部な！」
セディ「え?!　なぜ?!……ホップスさん、貴族と聞いただけで腹が立つんでしょ！」
ホップス「滅相な！　そんな事はないよ……ほんとは大好き、そう、大好きなんだよ！」

セディ「へんなの。ホッブスさん、どうかしちゃったんじゃない？」
ホッブス「いや、どうかしちまったのは、セディのほうだ」
セディ「え……ぼくのほう?!」
ホッブス「いや、その、なんだ……セディが、貴族だったとは全然
知らなかったもんだから」
セディ「ええッ……ぼ、ぼくが貴族?!」
ホッブス「ごめんよ、セディ！　そうとも知らず、貴族の悪口を言
っちまったけど……わしを嫌いにならないでくれよ……
これからも仲良く……お願いしますよ、セディ！」
セディ「ぼくが貴族だなんて……ウソだ!!」
眼を丸くして叫んでパッと走るセディ。

31

セディの家・アニーの部屋（夕）

ミシンに向っているアニー。

セディが飛び込んで来る。

セディ「母さん！　ぼくが貴族だなんて、ウソでしょ!!」

ええッと顔を向けるアニー。

セディ、アニーの顔に顔をくっつけるようにして、

セディ「ウソだよねッ……ぼくが貴族だなんて……ウソだよねッ!!」

つづく